The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	白秋『邪宗門』序文の詩論について
Author(s)	明石, 利代
Citation	語文. 1960, 23, p. 30-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68544
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

（37頁から）

集』のばあいは、西欧の象徴詩が自然主義文学を地盤としているのを個人の知識で獲得して創りあげたのであって、その当時の文学的環境と社会状勢とにはまだ自然主義文学の地盤はできてはおらぬ。このような現実に地盤をもたぬという文学的事情は、やはり心情の自由な発露を妨げて有明の詩のかたさとむつかしさとの原因の大きな要素となっているのは否定できぬであろう。それに比べて客観的な立場よりする時は、論理性をもたぬうえに独自の主張が認められぬゆえに詩論としての独立性をもたぬものといえる『邪宗門』の序文は、現実に地盤をもっている点に於てはるかに創作と享受とを含む実際の詩史展開のうえには力をもつとせねばならぬ。同じ象徴詩論とはいいつつ『春鳥集』のと『邪宗門』のとでは、地盤との関係、因襲との関係が異質なのが明らかにできる次第であるが、それは有明より白秋へというわが国の象徴詩の推移に断層があるのを示すのにほかならぬであろう。